

長田順行 著

推理小説と暗号

付 小栗虫太郎と暗号

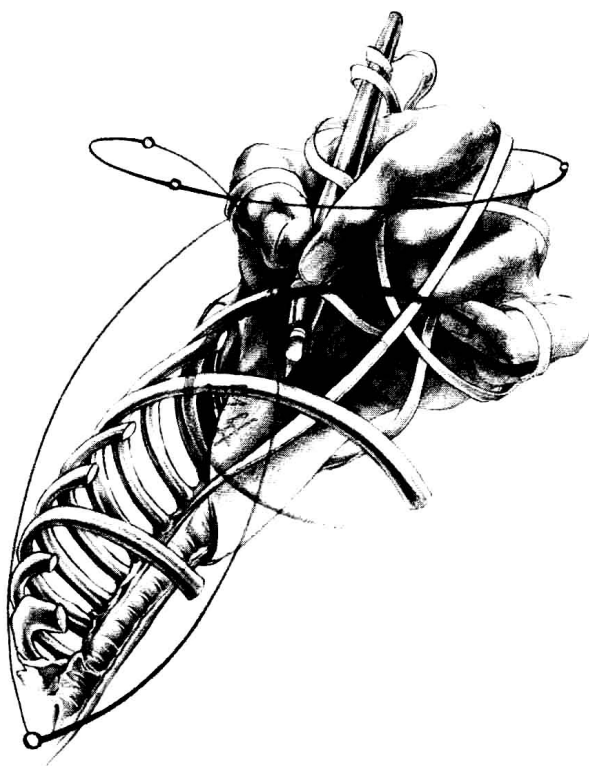
新・暗号記法の種類

解説 中島河太郎



推理小説と暗号

長田順行



ダイヤモンド社

著者略歴

なが た じゅん こう
長 田 順 行

昭和4年、広島県呉市に生まれる。呉第一中学校、海軍兵学校、広島大学に学ぶ。

日本推理作家協会会員。

主著：『暗号—原理とその世界』『暗号の秘密』（ダイヤモンド社）

現住所

〒281 千葉市長沼町269-22

稲毛ファミリーハウス20-106

推理小説と暗号

昭和54年12月20日 初版発行

¥ 1500

著 者 長 田 順 行

© 1979 Junko Nagata

発行所 ダイヤモンド社

郵便番号 100
東京都千代田区霞が関 1-4-2
編集電話 東京 (504) 6403
販売電話 東京 (504) 6517
振替口座 東京 9-25976

編集担当／加藤米二

落丁・乱丁本はお取替えいたします

松濤印刷・高陽堂製本

1095-740010-4405

はじめに

本格推理小説と同様に、暗号を扱った推理小説の貧困がいわれるようになって久しい。一時はこの種の作品の数は多かったにもかかわらず、いまだに欧米ではポーの『黄金虫』、わが国では江戸川乱歩の『二銭銅貨』がそれぞれ最初の最高の作品であるとされているのも不思議な現象である。

特に第二次大戦後は、「暗号記法が非常に進歩し、以前、暗号というものに面白味を与えていた機智の要素が全くなくなって来た」という理由が一般に信じられている。もしそうならば、乱歩が暗号小説と呼んだものの今後に期待はもてないことになってしまう。

本書は、主にこの点を明らかにしようとするものである。しかし、各章は機会をみてそれぞれ独立に書いたものなので、全体としては必ずしも考え方が統一されているとはいえないし重複もある。この点を補う意味で、はじめにその要点を述べておくことにする。

暗号を扱った推理小説には、〈なぞ〉形式のことば遊びによるものと、暗号によるものがある。この二つのものが重なりあっている理由は、〈なぞ〉形式のことば遊びも暗号もともにことばに対する人為的操作にはかならないからである。

ことばは、きまった音（文字）がきまった順序に並び、それがきまった意味をもつわけ

であるから、〈へなぞ〉や暗号を作るためには、この三つの要素のいずれかを変化させることになる。したがって、〈へなぞ〉形式のことは遊びと暗号を原理的な面から区別することはむずかしい。

〈へなぞ〉形式のことは遊びと暗号を区別するものの一つは、見掛け上の違いであろう。

〈へなぞ〉はその本質が問いかけであるから、見掛け上は意味のある言葉でなければならぬが、暗号の多くは記号の羅列である。たとえば、文字の順序を入れ替えるという操作にしても、その結果が意味のあるものはことば遊びとしてのアナグラムであるし、無意味なものは転置式の暗号と呼ばれる。

次に、忘れてならないのは実用の暗号と推理小説の暗号の違いである。実用の暗号は初めから解かれることを前提に使われることは少ない。しかし、推理小説の暗号には、提出された謎は最後にすべて解決しなければならないという推理小説の宿命がそのまま当てはめられる。したがって、扱われる暗号は必ず解けなければならない。いってみれば、それは練習問題的な性格をもっている。その意味では、推理小説に扱われる暗号は秘匿ごっこであり遊びであって、この面でもヴァン・ダインの「探偵小説は普通の意味での『小説』の項目に当てはまるものではなく、むしろ〈へなぞなぞ〉の範疇に属するものである」という言葉は正しい。

ここで、暗号を中心にすえた作品を暗号小説、〈へなぞ〉形式のことは遊びを中心にすえた作品を暗号的小説と呼ぶこととし、その特徴と違いについて述べてみよう。

暗号小説では、謎は記号の羅列として提示される。この場合、使用する暗号方式は専門分野から探してくるのが賢明であろう。下手をすると、キャロルの二の舞をすることになる。かつて、『不思議の国のアリス』などでも有名なルイス・キャロルは、『キャロルの暗号表』なるものを発表した。実はこれは〈ヴィジュネル表〉(一五八六)に過ぎなかった。

いずれにしても、暗号小説の場合には謎としての見掛け上の面白味はないから、その妙味は暗号方式の推理とその論理的な解き明かし、すなわち謎解きに求められることになる。そのよい例が、文字の頻度を利用する解読法の小説化ともいうべきポーの『黄金虫』であろう。こういった具体的な方法は専門書をよく読むことによって得られる。その一例は、第五章にも示しておいた。また、自分でさらに簡単な解き方を工夫してみるのも楽しいことである。幸いなことに、推理小説では前提条件をいくらでも設定できるから、複雑な問題を簡単な問題に置き換えることが可能である。

なお、乱数や暗号機の登場について、そう神経質になる必要はない。乱数は繰り返し使えば簡単に解けるし、暗号機にしても条件の与え方次第では解くことはたやすい。むしろ、こういったものにさえ挑戦する気構えが欲しいものである。

これに対して、暗号的小説の妙味は、なんぞという問いかけ、すなわち謎の設定の見事さにある。たとえば、点字と六字の番号(南無阿弥陀仏)を結びつけた『二銭銅貨』の暗号のすばらしさを思い出していたきたい。このように、暗号的小説では暗号の常識もさ

ることながら、作者の機智のいかんによってその妙味は左右されることになる。

以上が、推理小説に扱われる暗号をごく大ざっぱに分析した結果であるが、こうしてみると、今日の貧困の原因は暗号そのものにあるのではなくて、明らかに作者の側にあるように思えるのである。そういった意味で、本書がわが国の推理小説分野の啓蒙にいささかでも役に立てば幸いである。

なお、中島河太郎先生から過分な解説をいただいたことは身に余る光栄であって、今後の精進をもってお応えしたいと思う。

また、装幀とカットを心よくお引受けいただいた建石修志氏、ならびに本書の企画・編集面で数年にわたってお世話になったダイヤモンド社の加藤米二氏、面倒な割付けや校正をお願いした萩原光子さんに心からお礼を申しあげる。

昭和五十四年十月十三日

長田 順行

目 次

はじめに

I 新・暗号記法の種類

1

II 暗号を解く

33

III 暗号小説を論ずる

71

IV シェークスピアの謎

99

V 暗号小説は袋小路だろうか

127

付1 小栗虫太郎と暗号

145

付2 新・暗号記法の種類表

折込

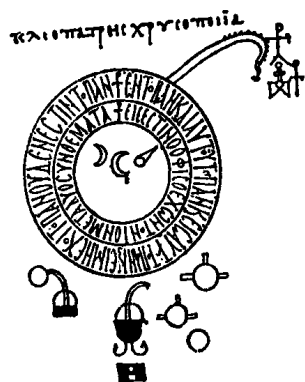
解説 中島河太郎

204

あとがき

I

新・暗号記法の種類



推理小説の眞の創始者エドガー・アラン・ポーが、『モルグ街の殺人』や『マリー・ロジェーの怪事件』に次いで、暗号とその解説法の小説化ともいべき『黄金虫』を発表したのは、一八四三年のことである。それ以来、暗号を扱った作品は相当な数にのぼっている。しかし、実際にはポーの『黄金虫』、ドイルの『踊る人形』（一九〇三）、あるいは江戸川乱歩の『二銭銅貨』（一九二三）のように、暗号をトリックの中心にすえて、謎と推理と解決という基本コースで書かれた作品は少なく、むしろ暗号を小道具程度に使ったものがほとんどである。

江戸川乱歩の「暗号記法の分類」という小論は、各暗号形式の解説を加えながらこれらを分類したもので、最初は雑誌「探偵趣味」（大一一四）に、さらにそれは随筆集『悪人志願』（昭四）で加筆され、昭和二十八年の『類別トリック集成』で今日の内容になっている。これをわかりやすいようにまとめたのが次ページの表である。

この乱歩の「暗号記法の分類」は、わが国ではいまだに暗号小説を論じる場合の典拠となっており、ごく最近のものでいえば渡辺剣次『13の暗号』（昭五〇）、石川喬司『SF・ミステリおもしろ大百科』（昭五二）、九鬼紫郎『推理小説入門』（昭五四）などの解説もみなそうである。

しかし、二十数年を経た今日では、その見直しが必要なるように思う。そこで、基本的に

江戸川乱歩の分類

副符法〔スバルタで使用された Scytale などを作す〕

変形法〔物の形あるいは道順など〕
〔の図形であらわす方法〕
ルイラン
甲賀三郎
M. P. ツール
ヘルラー

寓意法〔謎詩などの寓意
の暗号を作す
(隠文式)〕

ガニ
涙香 (訳)
トイル
ボースト
ベントリー
M. R. ジェームズ
O. ヘンリー
セイヤー
フリシガム
ベイトリー
ベントリー

置換法
(転置式)

- (1) 普通置換法
 - (イ) 逆進法
〔さかさに読む方法〕
 - (ロ) 横断法
〔横または縦に読む方法〕
 - (ハ) 斜断法
〔斜めに読む方法〕
- (2) 混合置換法〔ある法則により順序を入れ替える方法〕
- (3) 挿入法
〔語・句を挿入する方法〕
語挿入法—トイル
句挿入法—ボイル
- (4) 窓版法〔字を挿入する方法、回転される場合も含む〕
(分置式)

黒手組

ギリシア・スコント号
ギリシア語通訳

奇麗城
琥珀のバイナ
S. S.
皇帝の古着

黄金塔
幽霊塔
メスグレレイザ家の儀式
大暗号
(邦訳「ジュバネーの探検日記」)
救いの神
トーマス寺院の宝物
キヤロウズイ君の暗号
学問的冒険・電の頭
白象事件
スミレ花園
無邪気な船長

黄金虫
舞踏人形

二重の十三
暗号錠

奇妙な暗号の秘密
盗まれたクリスマス・ボックス

ヒアソンズ伯父

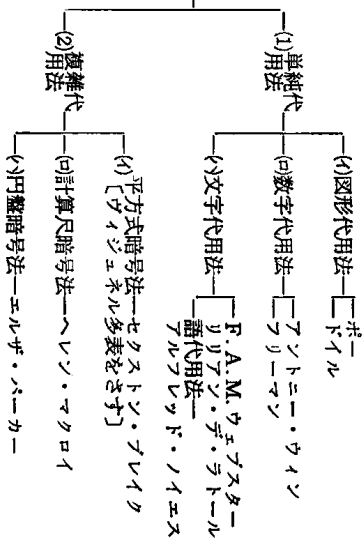
探偵譚

パニツク

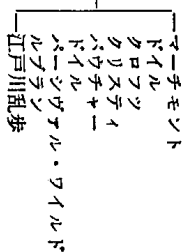
ミカエルの鍵

ホーレイ氏の秘密
恐怖の谷
フレンツ
四人の嫌疑者
Q.L. 696, C9
赤い輪
火の柱
太陽の戦れ
二銭銅貨

代用法 (換字式)



媒介法 (書籍や火花信号を媒介)



は乱歩の「暗号記法の分類」の主旨を尊重し、内容的には一般に通用する形に手を加えてみることにしたい。なお、暗号形式に関する詳しいことは、拙著『暗号』（ダイヤモンド社）などを参考にしてもらうことにして、ここではごく簡単に解説することにする。

一 暗号法の原理と分類

暗号法とは、内容の秘匿を目的としたことばの使用法のことである。しかし、英語で暗号法を意味するクリプトグラフィ（cryptograph）の語源が〈秘密の文字の書き方〉というギリシア語からきているように、一般には文字で書かれたものを主対象にしている。

もっとも簡単な暗号法は、第三者の知らないことばを使用する方法である。

フランスのラブレール（二四九四？—一五五三）の『パンタグリユエル物語』のなかに、主人公のパンタグリユエルが家来のパニユルジュに初めてパリの郊外で会ったときの話がある。呼び止められたパニユルジュは、ドイツ語、イタリア語、スコットランド語など一二種類ものことばで同じようなことを答える。しかし、どのことばもパンタグリユエルには通じない。そして、一三番目のフランス語で、やっと話が通じる。

この挿話は、第三者の知らないことばは暗号であることをよくあらわしている。そういった意味合いからすると、われわれにとってほとんどの外国語は暗号であるといっても差し支えない。

なお、ことばのなかには同じ国語の範囲内であっても、限られた一部にしか通用しない特殊語がある。特殊語は、地域生活を中心にした方言と特殊な集団を中心にした社会方言に区分される。社会方言には一般的に隠語と呼ばれているものをはじめ、芸人語・学生語・軍隊語のようなものがある。これらは地域的・社会的な環境によって多種多様であって、各人によって差はあるにしても、実際には知らない特殊語は非常に多い。

また、われわれの周りには、ことばの代用と考えて差し支えないものがいくつもある。たとえばモールス符号のように、通信の目的を果たすために文字を符号化したもの（仮りに通信語と呼ぶ）、主として発音上もしくは表記上の煩わしさを避けるために語形からその一部を省略したもの（略語）などである。また、普通の文字では話す速度に追いつかないので、特別に記号・符号を考案したもの（速記文字）、盲人やろうあ者のためのことば（点字・手話）などがある。これらは内容の秘匿の目的をもってはいないが、その使用範囲が限定されている点で、より暗号に近い。

知らないことばを利用した代表的な例に、ドイルの『ギリシア語通訳』のあることはよく知られている。また、ハガードの『洞窟の女王』という作品の初めの部分に、一九七三字に及ぶ語間をつめたギリシア語の文章がでてくる。これは、知らないことばが与える謎めいた雰囲気とともに、内容の一時的な秘匿をねらったものである。

次に一般的な暗号法について述べてみよう。